博物館アラカルト⑤

資料紹介

白河関真景図 ～未だ見ぬ陸奥の入口～

白河関（福島県白河市）は、勿来（なこそ）関・念珠（ねず）関とともに奥州の三古関として、5世紀頃に蝦夷対策として設置されたとされています。その機能が失われた後も，歌枕に度々詠まれました。「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関」と読んだ能因法師の句は有名です。

現在の白河関跡は、寛政12年（1800）に白河藩主松平定信（1758～1829）が藩内を調査し定めたものです。

白河真景図　星野文良画

白河関から関山を望む。

当館所蔵の『白河真景図』（黄葉夕陽文庫）は、白河藩の絵師星野文良が描いたものです。白川関から見た関山を中心として描いており、現在でもその場に立てばその風景を見ることができます。

この図には白河の水で墨汁を作ったことや、田内主税（定信の近侍）により、定信の「しら川の関路のあとをたづぬれハ今もむかしの秋かぜぞふく」という和歌が添えられています。

神辺の儒学者菅茶山は，白河藩の藩士と深い交流を重ねており，この図もそうした交流の中から贈られたものです。能因法師が詠んで以降，西行・一遍上人・宗祇などが詠んでいます。また、松尾芭蕉も白河関を訪ね彷徨い歩いています。この場所を訪ねた人はこの風景を見たのです。

茶山自身はこの風景を見ていません。しかし、この図を見て茶山は白河関に思いをはせたのではないでしょうか？この一枚の図には「友を喜ばしてあげたい」という思いがひしひしと伝わってくるような気がします。

白河古跡碑